

愛と自己犠牲：
星の王子さまの死の意味について 第三, 四部

眞 柳 麻 美

Love and Sacrifice:
The meaning of Death in *Le Petit Prince*
—— Part III , IV ——

MAYANAGI Mami

第三部

星の王子さまが次に会える大人もまた、サン＝テグジュペリの風刺の対象です。その大人はアルコール中毒の男性で、自分がお酒を飲み続けるのはお酒を飲むことの恥を忘れるためなのだと王子さまに言います。この大人の言い分は、王子さまにはとても愚かに聞こえます。そして、限りなくお酒を飲み続けるこの大人は、消費時代の象徴でもあるのです。この点に関して Drewermann は以下のように書いています。

The self-destruction of the *alcoholic* can represent the attempt to inhale the entire world, simply to do in his mind. The reverse form of this addiction is *greed*, the seemingly sharp-witted but actually absurd transformation of the whole world into an office building-warehouse, possibly culminating in the ruin of the planet.¹

(訳) アルコール中毒による自己破壊は、全世界を飲みつくしてしまうという心の中の挑戦を表しています。この中毒の裏返しの形をとっているのが「貪欲」であり、(この逸話は) 一見鋭いウィットに富んでいるように見えるが、実は、愚かにも世界全体をオフィスビルや、倉庫に変えてしまい、最終的には地球を廃墟に変えてしまうような貪欲を示しているのです。

¹ Drewermann, 33

Dremermann のこの解釈は、*Terre des Homme* (人間の土地) の中の、餌となるかたつむりが繁殖し続けられるように全てのかたつむりを決して食べつくしてしまわない *fénich* (小さなきつね) の逸話と関連付けてみると、よく分かると思います。この逸話は、生産と消費のバランスを維持するには、生産したものすべてを消費してはいけないということを忘れてしまった現代の人間に対する批判なのです。

現代人に対するサン＝テグジュペリの風刺は、王子さまが次に訪れる惑星の住人であるビジネスマンと王子さまの会話の中に最も良く表れています。このビジネスマンは、星の数を数えるためだけに生きており、数えた星を紙の上に書いて銀行に保管しています。王子さまが何故星の数を数えるのかと聞いたとき、このビジネスマンは、“Rien. Je les possède.” (特になに。所有しているだけだ。) と言います。² 王子さまは、王様もその星の所有権を主張しているとビジネスマンに伝えますが、ビジネスマンは、王様は権威を示すために星を支配しているだけなので、自分はその星を所有して富を得るのだと答えます。しかし王子さまにとって、物の価値を正しく分かっていないという点においては、この二人には何の違いもありません。人々は、物を所有したりお金に変えたりすることによってのみしか、物事の価値を理解できません。物事があるがままに理解できなくなった人々は、星々の美しさを感じることもできません。

王子さまは、大人たちと王子さまとでは物を持つということに対する考え方が違うことに気付きます。ビジネスマンは、お金持ちになるための手段として星を利用しているだけなのです。この点に関して、Dremermann は、サン＝テグジュペリのメッセージを以下のように説明しています。

The danger of money is that it may turn from a means of exchange for all possible goods into the quintessence of all possible values, into a metaphysical entity. In that case dealing with money no longer means enjoying the things that money *can*, after all, buy. The idea is now to get as much money as possible, not to buy, but to be able to buy. This is exactly how we define people of money, the capitalists, who renounce all private enjoyment of money so they can have a lot of it and make a whole lot more.³

(訳) お金のもつ危険性は、可能な限りすべての物に交換できる手段としての金銭から、すべての価値を表す真髄、すなわち形而上的な存在へと変わってしまう可能性があるところです。この場合、お金を扱うことがもはや、最終的にはお金で買えるものを楽しむための手段ではなくなっているのです。これはまさにわたしたちが定義する、お金の私的な楽しみをすべて放棄して、そのお金をたくさん所有し、更に増やそうとしている拝金主義者、つまり資本主義者のことなのです。

² PP, 47

³ Dremermann, 34

人々はお金そのものに執着しているために、自然の美しさに触れたときや、人を愛し人に愛されたときに感じるような精神的な満足感が得られないのです。

一方でこの高貴な少年は、小さな火山を掃除したり、毎日花に水をやったりしながら自分の住む小さな惑星を大切にしています。王子さまは言います。“C’est utile à mes volcans, et c’est utile à ma fleur, que je les possède”. (僕がもっている火山と花にとって僕は役に立っているんだ。) ⁴ 王子さまにとっては、自分が持っているものの役に立つということと、そのものに責任を持つということが大切なのです。サン＝テグジュペリは責任を持つことの大切さについてしばしば、作品の中で語っています。この責任という概念によって、人と人、物事と物事の間のつながりが強くなり、ひいては国と国でさえ強く結ばれるようになります。ここでサン＝テグジュペリは、責任を持つことの大切さを忘れてしまった大人たちを批判しています。現代社会に生きる人々は、物事に対する責任を放棄し、物そのものを大切にする心を失っています。人々は、すぐに新しいものを買い、古いものを簡単に捨て去ります。人々はこの悪習慣を当然と思っており、無駄な消費であることに気づきません。資本主義の台頭によって、物にではなくお金そのものに執着するようになったのです。その結果として、自分たちの仲間や社会への関心が薄くなっています。人々のこのような様相をビジネスマンの性格として描写し、王子さまに、君は役に立って (“utile”) はいないね、と言わせています。⁵ サン＝テグジュペリは、他の人間や社会とのつながりを失った個人は、もはや社会の役には立たないのだということを言おうとしているのです。

地球に来る前に王子さまが最後に訪ねたのは地理学者です。この地理学者は自分の書斎に座ったままで探検家たちの話を聞き、ただひたすらに知識を集めています。知識人であり飛行士でもあるサン＝テグジュペリは、現実の世界で行動し飛行士として働くことと、作家として自らの行動と経験から培った自分なりの考え方を著すことの両方が重要と考えています。サン＝テグジュペリから見ると、知識を集め続けるだけで、自分では決して動こうとしないこの地理学者は、資産を蓄積しお金だけを集めている人々と変わりません。王子さまは、地理学者と次のようなやりとりをしたあとで地理学者もまた王子さまの期待を裏切ったと感じます。

- Elle est bien belle, votre planète. Est-ce qu’il y a des océans?
- Je ne puis pas le savoir, dit le géographe.
- Ah! (Le petit prince était déçu.) Et des montagnes?
- Je ne puis pas le savoir, dit le géographe.
- Et des villes et des fleuves et des déserts?

⁴ PP, 49

⁵ PP, 49

- Je ne puis pas le savoir non plus, dit le géographe.
- Mais vous êtes géographe!⁶

(訳)

「あなたの星はとても綺麗ですね。海はありますか？」

「知らないな」と地理学者は言いました。

「え？（王子さまはがっかりしました）。では、山はありますか？」

「知らないな」と地理学者は言いました。

「では、町や川や砂漠はありますか？」

「それも知らないな」と地理学者は言いました。

「でも、あなたは地理学者でしょ！」

この学者は自分自身にとって大切な問題については何も知らず、遠方より来る他人からの情報を集めているだけなのです。Drewermann は以下のように書いています。

His parasitical vicarious life claims to be celebrating itself as knowledge of what is permanent, but his quasi-metaphysical abstinence vis-à-vis the impermanent prevents him from discovering anything living as real.⁷

(訳) 寄生動物のように、他人の経験を自分のことのように感じながら生きる彼の生活は、その生き方自身を永遠の知識として祝福されたものであるとみなしています。しかし彼のはかないものに対する半形而上学的な禁欲によって、彼は、現実生きる何物をも発見できないでいるのです。

この学者は、現実の世界を直接見つめることを知らずに他人から孤立しています。これは地理学者だけの問題ではなく、孤立した小さな惑星に一人きりで住み他人のことを考えずに生きている他の大人たちにも言えることです。地理学者は美しい花などにも全く関心を持っていません。“les fleurs sont éphémères (花は儂い)” ので、学者の知識としては役に立たないと考えています⁸。他の大人たちと同様に、この知識ある学者もまた、物事の美しさや本質を評価することができないのです。

王子さまが訪れた大人たちのなかで、街灯点灯夫だけは他の大人と違いました。最も小さな惑星に住んでいるこの男性の仕事は、毎朝毎晩自分の星の街灯に火を点すことです。王子さまは、この点灯夫を愚かな大人たちとは違うと考えます。

⁶ PP, 54

⁷ Drewermann, 39

⁸ PP, 56

Au moins son travail a-t-il un sens. Quand il allume son réverbère, c'est comme s'il faisait naître une étoile de plus, ou une fleur. Quand il éteint son réverbère, ça endort la fleur ou l'étoile. C'est une occupation très jolie. C'est véritablement utile puisque c'est joli.⁹

(訳) 少なくともこの人の仕事には何か意味があるだろう。街頭を点けるのは、一つの星に命を与えるようなものだ。もう一つ花を咲かせるようなものだ。火を消すときには、その花や星を眠らせてあげるようなものだ。とても美しい仕事だ。美しいから本当に役に立っているんだ。

王子さまは、王様やビジネスマンの仕事と、点灯夫の仕事の違いを見抜きます。王様は無限の数の星を支配し、ビジネスマンはたくさんの星を所有していますが、二人ともその星たちを利用しているだけで、その星々のためには何の役にも立っていません。一方この点灯夫は、たった一つの本当に小さな惑星に懸命に奉仕しているのです。この謙虚な男の人は、王子さま自身がそうであるように、自分の惑星に“utile”（役に立つ）存在なのです。

小さな王子さまはこの大人の本当の美德を少しずつ理解していきます。点灯夫は決して怠ることなく、日没とともに街灯を点け、日の出とともに消すという命令に従って生きています。この惑星は一分間に一回という猛スピードで公転するため、点灯夫は休むことができません。彼は命令に従うために、自分が最もしたいと思っている睡眠まで犠牲にしています。しかしこの点灯夫も人間性に内在する問題は持っているのです。結局、この労働者もたった一人で小さな惑星に住み、他人に気を遣うことを知らず他の世界から孤立しています。この点に関して Drewermann は以下のように言っています。

The life of this “slave to duty” is split into the sense of sleep, switching-off, extinction. ... He too is an addict, as unteachable and incapable of change as all the other “big people”, and above all unable to harmonize his will with his actions, or vice versa. ... he bemoans what he has to do, and he bewails his fate. His reading of himself and the world is that he is and will forever remain a victim of the circumstances that prescribe what's to be done. ... And on this cramped little planet of dutifulness and lethargy, of overexertion and spiritual idleness, it's impossible to realize any form whatsoever of community, exchange, or life as a member of a couple.¹⁰

(訳) 「義務の奴隷」となっているこのような生活は、睡眠やスイッチ・オフの状態や、消火された状態へと分裂します。彼もまた中毒患者であり、他の大人たち同様に、もはや教育を施すことも変化をさせることもできなくなっています。それにもまして、自分の意志と行動、または行動と意志の間を調和させることができなくなっています。彼は自分がしなければならないことに対して嘆き悲しみ、自らの運命を悲しんでいます。彼が自分自身と世界をどのように理解している

⁹ PP, 50

¹⁰ Drewermann, 37 - 38

かと言えば、自分はすべきことを定められてしまった状況の永遠の被害者であり続けるというように理解しているのです。そして従順と無気力と過度の努力と精神的怠惰のこの窮屈な小さな惑星では、いかなる形の共同体と交流することも、一組の夫婦の一員としての生活を実現することもできないのです。

確かに点灯夫は、日々の単調な仕事の犠牲となり自分自身を卑しめていると言えます。しかし、この単調な仕事にも、確かな人間の美徳が必要とされるのです。Drewermann は、以下のようにも言っています。

Still, objectively speaking, his activity, as a service, has a certain spiritual dimension. And even if the man himself does his utmost to get through it as mindlessly and joylessly as possible, it is enveloped by a certain gleam of commitment, responsibility, and courage, which are thoroughly spiritual.¹¹

(訳) しかし客観的に考えれば、奉仕としての彼の行動には、ある精神的な要素があります。彼自身ができるだけ盲目的にそして、喜びを抑えて仕事を成し遂げるために最大限の努力をしたとしても、その仕事は献身、責任、勇気という名の完全に精神的なある種のかすかな輝きの中に包まれるのです。

規則に対する点灯夫の従順さには、責任感が伴っていることは確かです。サン＝テグジュペリは、人間社会で働き、生きるためには責任感という概念が大切であるということを言おうとしています。

「夜間飛行」における責任感

サン＝テグジュペリが点灯夫の逸話で伝えようとしていることをはっきりと理解するために、「夜間飛行」(*Vol de Nuit*)の逸話に触れたいと思います。サン＝テグジュペリは「夜間飛行」で、世界に対して誠実に、そして勇敢に戦い続ける成熟した大人たちを描いています。彼らは、個人の利害を追い求めるのではなく、崇高な目的を達成するために、強い責任感を持って働き続けています。

「夜間飛行」の舞台は20世紀始めの航空会社です。現在と違って20世紀始めのプロペラ機を操縦することは大変危険なことでした。しかし、この航空会社の飛行機は、操縦士の死亡率が特に高い夜間に郵便物を配達しているのです。死と隣り合わせの世界で生きる飛行士たちは、郵便を運ぶことによって人と人をつなげる仲介者としての役割を果たすことに責

¹¹ Drewermann, 38

任と誇りを感じています。この会社では、飛行士以外の労働者たちでさえ自分たちの仕事に誇りを持っています。自らの仕事に献身的な従業員たちは私生活の幸福さえも犠牲にしています。この物語の主人公である厳格な経営者リヴィエールは、私的な満足感を犠牲にしまで献身的に働く人たちを賞賛し、‘Si les insomnies d’un musicien lui font créer de belles oeuvres, ce sont de belles insomnies’。（堀口訳：「不眠症が音楽家に傑作をなさせるとしたら、それは結構な不眠症だ」）と述べています。¹² サン＝テグジュペリは、私的な生活における満足感や個人的な利害を犠牲にしまで自らの職業を追求することが偉大であると考えています。

責任という概念は、時として冷たく、非人間的に響くことがあります。しかしそれは、実は人間愛という概念に基づいているのです。他者に厳しくすることによって、人々を守り強くし、共同体という枠組みの中でどのように生きればよいのかということを教えてくれるものが、責任感の伴った愛なのです。特に大きな危険が伴う仕事には、このような愛の形が必要となります。リヴィエールが経営している会社の業務には、かなり大きな危険が伴っています。夜間飛行はとても危険であり、この会社に雇用された飛行士の多くが、その夜間飛行の最中に事故で亡くなります。しかしリヴィエールは、この危険を最小限に抑えるためにすべきことを心得ています。飛行士をはじめとする従業員たちに厳しい規則を課すことによって、飛行機事故の原因となっている人間の弱さを少なくすることができると、リヴィエールは信じています。その規則を守るためにリヴィエールは、時には理不尽と思われるような態度もと取り、公平さや正義ということですら考慮しません。彼にとっては、規則が全てです。“‘Le règlement, pensait Rivière, est semblable aux rites d’une religion qui semblent absurdes mais façonnent les hommes’。Il était indifférent à Rivière de paraître juste ou injuste.”（堀口訳：リヴィエールは考えていた、「規則というものは、宗教でいうなら儀式のようなもので、ばかげたことのようにだが人間を鍛えてくれる」リヴィエールにとっては、公平と見られようと、不公平と見られようと、そんなことはいっさい平気だった。）¹³ しかし、リヴィエールが厳しい規則を課すことは、飛行士たちに対する暗黙の愛の証なのです。リヴィエールは言います。“Tous ces hommes, je les aime, mais ce n’est pas eux que je combats. C’est ce qui passe par eux...”（訳：「あれらの人々を、みな僕は愛している、僕が戦っているのは彼ら相手ではない。彼らの中をよぎるもの、つまり過失が僕の相手だ...」）¹⁴。リヴィエールは「偉大なる仕事」（“Une grande oeuvre”）を達成するために、彼の下で働く人た

¹² Antoine de Saint-Exupéry, *Vol de Nuit*, (Paris, Gallimard, 1931), 62

以下“*Vol de Nuit*”, “*Terre des Homme*” の和訳に関しては、堀口大樹訳「夜間飛行」, 「人間の土地」(新潮社, 東京) を引用する。

¹³ VN, 46

¹⁴ VN, 89

ちを強化しなければなりません。さもないと、人間の弱さのせいで人も仕事も破滅してしまいます。そのためリヴィエールは会社の経営者として、他者から愛されることを完全に諦め、人に対して批判的な態度をとり続けるのです。ある意味でリヴィエールは、愛する従業員たちに対する責任を負うために、自らの利害を犠牲にしているのです。

飛行士たちに厳しく接しなければならない立場にある監督官のロビノーという男が、飛行士たちの友情を得ようとしているところを目撃したリヴィエールは、ロビノーを叱責します。

Si c'est par amitié qu'ils vous obéissent, vous les dupez. Vous n'avez droit vous-même à aucun sacrifice... Et, s'ils croient que votre amitié leur épargnera certaines corvées, vous les dupez aussi: il faudra bien qu'ils obéissent.¹⁵

(堀口大學訳：

そのとき、彼らがもし、友情のため君に服従するとしたら、君らは彼らを裏切ることになる。君には、個人として他人を犠牲にする権利なんかまるでありはしないのだから... もしまた、彼らが、君の友情のおかげでいやな仕事からのがれることができると信じたりするようだと、同じく君は彼らを裏切ることになる。なぜかというに、彼らはどのみち服従しなければならないのだから。

この言葉によって、リヴィエールの愛に基づいた責任感が分かります。他人からの同情と自己の利害は決して望んではいけないのです。リヴィエールはロビノーに“Aimez ceux que vous commandez. Mais sans le leur dire.”(堀口訳：「部下のものを愛したまえ。ただそれと彼らに知らさずに愛したまえ。」)と言います¹⁶。人の上に立つ者は、愛することの見返りとして愛されることを期待してはいけないのです。それが責任感を持つということなのです。ここで言う責任とはほとんど愛と同義語になっています。

リヴィエールはロビノーに、愛されることを期待せずに飛行士たちを愛するように命じただけでなく、自らもまた従業員に対して厳しい態度で接しています。ある飛行士が悪天候の中で命の危険にさらされながらも奇跡的に生還した際、リヴィエールはその飛行士の勇気や勇敢さを認識しながらもそのことを褒めず、逆に道半ばで戻ってきたことを叱責します。時には自らの地位に対して困難さを感じながらも、リヴィエールは他者に対して常に批判的であり続けます。

Pour se faire aimer, il suffit de plaindre. Je ne plains guère ou je le cache. J'aimerais bien pourtant m'entourer de l'amitié et de la douceur humaines. Un médecin, dans son métier, les rencontre. Mais ce sont les événements que je sers. Il faut que je forge les hommes pour qu'

¹⁵ VN, 63

¹⁶ VN, 64

ils les servent.¹⁷

(堀口訳)

愛されようとするには、同情さえしたらいいのだ。ところが僕は決して同情はしない。いや、しないわけではないが、外面に現さない。僕だとてももちろん、自分の周囲を、友情と人間的な温情で満たしておきたいのはやまやまだ。医者なら自分の職業を遂行しながら、それらのものをかち得ることもできるのだが、僕は不測の事変に奉仕している身の上だ。不測の事変がいつでもこれを使い得るように、僕は人員を訓練しておかなければならない。

一人の飛行士が死亡したときでさえ、リヴィエールは、一人の人間の命よりも高い価値のある何ものかに奉仕するかのように冷静に行動しました。人間の生命をも超越するような永遠なる何者かの存在をリヴィエールはおぼろげに感じ、悲劇的な事故が起きてしまったときでさえ、自分の決意を崩しません。そしてリヴィエールは、自らの行動の意味を愛よりも高い価値のある責任感や義務というものに帰するのです。彼は考えます。“Aimer, aimer seulement, quelle impasse!” Rivière eut l’obscur sentiment d’un devoir plus grand que celui d’aimer.” (堀口訳：「愛する、ただひたすらに愛するということは、なんという行き詰まりだろう！」リヴィエールには、愛するという義務よりもいっそう大きな義務があるように、漠然と感じられるのだ。)¹⁸ リヴィエールは、責任と義務の意識が伴った行動によって、一個人を超越した、より大きな何者かに尽くしているのです。

¹⁷ VN, 103

¹⁸ VN, 131

第四部

「人間の土地」における「責任」の重要性

義務と責任というテーマは、サン＝テグジュペリの作品の中で繰り返し使われています。「人間の土地」(*Terre des Homme*)においては、責任というテーマがもっとも雄弁に語られています。「人間の土地」の冒頭でサン＝テグジュペリは、“L’homme se découvre quand il se mesure avec l’obstacle.”(堀口訳：人間というのは、障害物に対して戦う場合に、はじめて実力を発揮するものなのだ。)と書いています。¹⁹ サン＝テグジュペリ自身が、“l’outil des lignes aériennes.”(定期航空の道具)を用いて“les vieux problèmes”(昔からのあらゆる未解決問題)を解決していくという社会の仕事に参加していました。²⁰ サン＝テグジュペリは自ら行動し、その行動について書き記すことによって社会的な貢献の重要性を強調しています。サン＝テグジュペリは、個人が社会の枠組みの中で尊厳を持って生きることの大切さと人間として生きるものの意味について考えています。

社会の問題に立ち向かい、解決しようと努力することによってのみ、人間は自らの存在意義を見つけ出せるということをサン＝テグジュペリは示唆しています。サン＝テグジュペリは、“Mais voici l’heure du danger. Alors on s’épaule l’un à l’autre. On découvre que l’on appartient à la même communauté.”(堀口訳：ところがいったん危険に直面する、するとたちまち、人はおたがいにしっかりと肩を組みあう。人は発見する。おたがいに発見する。おたがいにある一つの共同体の一員だと。)と書いています。²¹ サン＝テグジュペリの見解では、共通の問題を解決するためにお互いが協力することによって、人々は個人の孤立化や利己主義を打ち負かすことができるのです。“On s’élargit par la découverte d’autres consciences. On se regarde avec un grand sourire.”(堀口訳：他人の心を発見することによって、人は自らを豊富にする。人はなごやかに笑いながら、おたがいに顔を見あう。)²² つまり、人々はお互いに協力することによって、存在意義を見出すことができるのです。

人が“la même communauté”(共同体)の一員であることを自覚し、社会の枠組みの中で自らの存在価値を見出すためには、職業を持たなければなりません。人は職業を通して、または社会の中で地位を築くことによって、社会の問題を解決することに貢献できるのです。サン＝テグジュペリは、すべての種類の職業は、人と人、そして人と社会をつなげることに役に立つと言っています。“La grandeur d’un métier est peut être, avant tout, d’unir des hommes.”(堀口訳：一つの職業の偉大さは、もしかすると、まず第一に、それが人と人を親

¹⁹ TS, 9

²⁰ TS, 9

²¹ TS, 37

²² TS, 37

和させる点にあるかもしれない。) ²³ サン＝テグジュペリにとって、操縦士という特別な職業も、歴史的に珍しいものではない農業という仕事も同じなのです。サン＝テグジュペリは、農夫たちが土地を耕すように飛行士たちもまた空を耕していると考えています。“Je me sens paysan des escales.” (堀口訳：ぼくは、じぶんを、空港を耕す農夫だと思っている。)²⁴ 彼の特別な職業と農業を関連付け、また、どのような種類の職業も基本的には同様の意義を持つということを示唆することによってサン＝テグジュペリが言おうとしていることは、人は自分の仕事に誠実に向き合いながら社会という枠組みの中に居場所を見つけることができるのだということです。社会の中で地位を築くことが人間にとって不可欠であるということは、昔から普遍的なことです。“le train de banlieue” (郊外列車) に閉じ込められた現代人にとってもまた、自分の居場所を見つけることは“heureux” (幸福) なのです。²⁵ しかし、資本主義と個人主義の影響で人々は自己本位になり、その結果として皮肉にも社会の一員としての個人の重要性は軽視されています。サン＝テグジュペリは、人々が自らの職業を通して社会に従事することによって真の幸福と尊厳を取り戻さなければならないと示唆しています。

人は仕事を通して、人と人、また人と社会との絆を強めることができます。しかし、その絆を深めるためには、個人がある種の規範を認識しなければなりません。サン＝テグジュペリの考えるその規範が、責任または義務という概念です。「人間の土地」の中でサン＝テグジュペリは、ギヨメという同僚の事故のエピソードについて書いています。ギヨメの飛行機は雪山に墜落したのですが、彼は奇跡的に生還します。サン＝テグジュペリの賞賛は僚友の強い責任感に向けられています。

Sa véritable qualité n'est point là. Sa grandeur, c'est de se sentir responsable. Responsable de lui, du courrier et des camarades qui espèrent. Il tient dans ses mains leur peine ou leur joie. Responsable de ce qui se bâtit de neuf, là-bas, chez les vivants, à quoi il doit participer. Responsable un peu du destin des hommes, dans la mesure de son travail.²⁶

堀口大學訳：

彼の真の美質はそれではない。彼の偉大さは、自分に責任を感じるところにある、自分に対する郵便物に対する、待っている僚友たちに対する責任、彼はその手中に彼らの歓喜も、彼らの悲嘆も握っていた。彼には、かしこ、生きている人間のあいだに新たに建設されつつあるものに対して責任があった。それに手伝うのが彼の義務だった。彼の職務の範囲内で、彼は多少とも人類の運命に責任があった。

²³ TS, 35

²⁴ TS, 150

²⁵ TS, 150

²⁶ TS, 47

ギヨメは、深い雪に覆われた山腹に墜落し、死んでも当然の状況にいました。死に抗って生きようとするよりも睡魔の誘惑にかられて安らかな眠りについてしまうことの方が簡単でした。しかしギヨメは、もし自分が家に戻らなければ妻の生活が困難になるということを考えて、“cinq jours et quatre nuits”（五日と四夜）もの間、極寒の中を眠らずに歩き続けて生還したのです。²⁷ ギヨメの生命は、もはや自分のものではなく、他者である彼の妻のものだったのです。ギヨメの責任感がこのような考え方を生み出したのです。

サン＝テグジュペリは、僚友の責任と義務の意識を大いに賞賛し、責任と義務の意識を持つことの重要性を強調しています。彼は、“Être homme, c’est précisément être responsable. C’est connaître la honte en face d’une misère qui ne semblait pas dépendre de soi.”（堀口訳：人間であるということは、とりもなおさず責任をもつことだ。人間であるということは、自分には関係がないと思われるような不幸な出来事に対して忸怩たることだ。）と言っています²⁸。つまり、人間は職業を通じて社会問題を解決してくことによって、責任感を養えるのです。サン＝テグジュペリが称えるこの気高い精神は、サン＝テグジュペリ自身が操縦士という危険な仕事に携わることによって培ったのです。サン＝テグジュペリにとって、この高尚な精神は単なる理想ではなく、現実的で実用的なものなのです。実際に、サン＝テグジュペリも彼の同僚と同じ責任感を持っており、その道徳心を経験によって獲得したのです。サン＝テグジュペリは、サハラ砂漠の真ん中に墜落した経験を語る中で、この精神について詳しく書いています。

生きて返ることがほとんど不可能であると思われるような状況の中でサン＝テグジュペリは、死が近づいていることを感じながらも何の“angoisse”（不安）も感じません。²⁹ しかし、決して死ぬことはできないという切迫感の中で、自分の心の中に強い責任感が息づいていることに気づきます。彼は次のように書いています。

Ah! J’accepte bien de m’endormir, de m’endormir ou pour la nuit ou pour des siècles. Si je m’endors je ne sais point la difference. Et puis quelle paix! Mais ces cris que l’on va pousser là-bas, ces grandes flammes de désespoir... je n’en supporte pas l’image. ...Chaque seconde de silence assassine un peu ceux que j’aime. ...Patience!... Nous arrivons!... Nous arrivons!... Nous sommes les sauveteurs!³⁰

堀口訳：

ああ！ぼくは安んじて眠るつもりだ、それがひと夜の眠りであろうと、また幾世紀も続く眠りであろうと。眠ってしまったら差別はないはずだ。それになんという平和だろう！ところが、彼方

²⁷ TS, 42

²⁸ TS, 47

²⁹ TS, 130

³⁰ TS, 130

で人々が発するであろうあの叫び声、あの絶望の大きな炎...、ぼくは考えるだけで、すでにこれには耐えかねる。この多くの難破を前にして、ぼくは腕をこまねいてはいられない！沈黙の一秒一秒が、ぼくの愛する人々を、すこしずつ虐殺してゆく。はげしい憤怒が、僕の中に動き出す、何だというので、沈みかけている人々を助けに、まにあううちに駆けつける邪魔をするさまざまの鎖が、こうまで多くあるのか？なぜぼくらの焚火が、ぼくらの叫びを、世界の果てまで伝えてくれないのか？我慢しろ... ぼくらが駆けつけてやる！... ぼくらのほうから駆けつけてやる！ぼくらこそは救援隊だ！

サン＝テグジュペリは、自分の生還を期待して待っている妻をはじめとする大勢の人たちを「助ける」ためにのみ自らの生命にしがみつこうとしました。サン＝テグジュペリは、自分の命が自分自身にとっては重要ではないと考えていました。彼は、*“Il n’y a que le social qui soit pathétique. Notre impuissance à rassurer ceux dont nous sommes responsables. Et non le revolver (that could kill himself to be relieved from the current suffering).”*（堀口訳：悲壮なのは、社会に関することだけだ。ぼくらに責任がありながらあの人々を、安心させることができないぼくらの無能力、これだけが悲壮だった。（自殺によって今この瞬間の苦しみから開放してくれるであろう）拳銃は悲壮ではなかった。）と書いています。³¹ サン＝テグジュペリは、人間が自我を抑え、他人や社会に対する強い責任感を持って生きることが重要であると言おうとしているのです。

責任感の大切さは、星の王子さまと点灯夫の会話の中からも読み取ることができます。賢いきつねが王子さまに責任を持つことの大切さを教える、というエピソードと関連付けて考えると、点灯夫のエピソードがサン＝テグジュペリの言おうとしていることを理解するための鍵になるのです。つまり点灯夫の責任感は、「人間の土地」で描かれているギヨメやサン＝テグジュペリが持つ責任感と同じなのです。二人とも自分の生命を守るためではなく、むしろ自分の時間を他人のために犠牲にしながら生きているのです。そこで王子さまは、点灯夫だけは愚かな大人には思えなかったのです。王子さまはその理由を *“C’est, peut-être, parce qu’il s’occupe d’autre chose que de soi-même.”*（それは、多分彼が、自分のこと以外のことに忙しくしているからだろう。）と説明しています。³² 点灯夫は社会的な貢献には無関心で自己中心的な大人たちと違い、自分の利益のためではなく、他者のために生きようとする責任感を備えているのです。

³¹ TS, 131

³² PP, 52

III

無垢な少年の死の意味

このセクションでは、王子さまの死の意味について議論します。サン＝テグジュペリの作品では、人の死が二重の意味を持っているように思われます。一つ目は、無垢な子供のように弱い人間が、社会悪の犠牲になるというものです。つまり、先のセクションで述べたように、社会がはらむ邪悪さや数々の問題が、本来無限にある人間の可能性を潰してしまうのです。特に小さくて無垢な子供のような人間は、その邪悪さに対して最も弱い存在なのです。「人間の土地」でサン＝テグジュペリは、かつては子供だった大人に対して、“Maintenant, la glaise dont tu es formé a séché, et s’est durcie, et nul en toi ne saurait désormais réveiller le musicien endormi ou le poète, ou l’astronome qui peut-être t’habitait d’abord.”（堀口訳：いまでは、きみが作られている粘土はかわいて、固くなってしまっていて、今後、何ものも、最初きみのうちに宿っていたかもしれない、眠れる音楽家を、詩人を、あるいはまた天文学者を、目覚めさせることは、はや絶対にできなくなってしまった。）と言っています。³³ 実際にサン＝テグジュペリは、大きな潜在能力を秘めた子供が社会によって比喩的に殺されてしまうことを目の当たりにしています。1935年³⁴にロシアを旅する際に、ある美しい子供を見つけて、次のように書いています。

Voici un visage de musicien, voici Mozart enfant, voici une belle promesse de la vie. Les petits princes des légendes n’étaient point différents de lui: protégé, entouré, cultivé, que ne saurait-il devenir! ... (cependant), Mozart enfant sera marqué comme les autres par la machine à emboutir. Mozart fera ses plus hautes joies de musique pourrie, dans la puanteur des cafés-concerts. Mozart est condamné.³⁵

堀口訳：

これこそ音楽家の顔だ、これこそ少年モーツァルトだ、これこそみごとな生命の約束だと。伝説の中の小公子たちも、この少年となんら変わるところはなかった、保護され、いつくしまれ、教育されたなら、この少年になりえないというものは何一つないはずだ！...（しかし）、少年モーツァルトも、他の子供たちと同じく、金属打抜き機にかけられる運命だ。モーツァルトが、キャバレーの腐敗の中であって、腐れはてた音楽を、自分の最大の喜びとするようになるのだ、せつかくのモーツァルトも、これで万事休するわけだ。

³³ TS, 21

³⁴ His actual reportage on the travel in Russia is carried in *Un Sens À La Vie* (Paris, Gallimard, 1956).

³⁵ TS, 181-182

1955年にコクトーが, “all children have genius (全ての子供は天才である)” と言ったように, 人がまだ子供で社会悪に染まっていないときには, 才能ある音楽家にでも何にでもなれる可能性をもっているのです。³⁶ 王子さまは, そのような子供たち全ての代表なのです。このことに関して Drewermann は, 次のように述べています。

The Little Prince is a “murdered Mozart,” a nostalgic memory of and a mournful hope in, a life that would have been called to greatness, if people would only let it. But they have dulled and deadened it in the bud by replacing all the mind’s alertness and sensitivity with a terror-stricken stultification through the organized annihilation of the emotions...³⁷

訳:「星の王子さま」は,「虐殺されたモーツァルト」であり, 人々がそのままに放っておきさえしたならば偉大なものと呼べるほどのものになったであろうひとつの命の追憶と哀しい希望なのです。しかし, 人々は子供に備わっているその命を鈍らせたり弱らせたりして, その感情を組織的に壊滅することによって用心深さと感受性を恐怖におびえた無能力なものにしてしまいます。

王子さまは世界の中でつくられた毒によって殺されます。大蛇に飲み込まれた目に見えない像を見たり, 星星の美しさや点灯夫の忠実さに感心できる王子さまの偉大さが, 実を結ぶ前に失われてしまうのです。不思議な蛇が王子さまに “Tu me fais pitié, toi si faible, sur cette terre de granit. Je puis t’aider un jour si tu regrettes trop ta planète.” (君みたいに弱い人は花崗岩でできたこの地球の上では可哀想だ。もし君が自分の星に帰りたくてどうしようもなくなったら, 君を助けてあげる。) といった様に, 王子さまはこの地上では自分の命を諦めなければなりませんでした。³⁸ この少年は, この世を生き抜くにはあまりにも弱く, 無垢でした。サン＝テグジュペリは, このように弱くて無垢な子供を社会悪の被害者であると考えています。王子さまの死は, このように解釈することができるのです。しかし, この高貴な少年の死は, 完全に受け身だったわけではありません。王子さまは死を自ら選んでもいるのです。このことに関して, 少年のこの死の意味を詳しく考えてみたいと思います。

王子さまが死を選んだのは, 自分の小さな星に帰らなければならないということに気付いたからです。それは生まれ故郷の星を旅立ってからちょうど一年が過ぎてからのことです。王子さまが星を出発したのは, 愛するバラとのいさかきが原因でした。そのバラは, 自分の美しさをはなにかけて, 少年を愛の下に屈服させようとしたのです。しかし, 彼女には精神的な美しさがありませんでした。彼女の虚栄心, 傲慢さ, 無知, そして自己撞着した言葉な

³⁶ Cited by Jean-Paul Sartre, *The Words*, (First Vintage Books Edition), 140

³⁷ Drewermann, 23-24

³⁸ PP, 60

どが王子さまを苦しめるようになったのです。彼女は、外見の美しさを鼻にかけて、謙虚に振舞うことを知りませんでした。彼女は王子さまの穏やかな性格につけこみ、彼女を暖めるための覆いを毎晩彼女にかぶせるようにと命令したりしました。やがて王子さまは、彼女を愛し続ける自信を失い、故郷の星を去ることにしたのです。

しかし王子さまはバラのことを忘れることができません。王子さまは、美しいけれどもうぬばれの強い花に対して、どうしたら忠実な愛を貫くことができるだろうと考え続けます。王子さまは飛行士に、このバラのことを次のように話しています。“Je n’ai alors rien su comprendre! J’aurais dû la juger sur les actes et non sur les mots. Elle m’embaumait et m’éclairait. Je n’aurais jamais dû m’enfuir! J’aurais dû deviner sa tendresse derrière ses pauvres ruses. Les fleurs sont contradictoires! Mais j’étais trop jeune pour savoir l’aimer.” (僕は何も分かっていなかった。僕は彼女のことは言葉でなくて行動で彼女を判断すべきだったんだ。彼女は僕の星をいい香りで満たしてくれた。僕を明るく照らしてくれた。僕は逃げてはだめだったんだ。彼女のずるそうな態度の向こうにある優しさに気づいてあげるべきだったんだ。あの花は本当に複雑だったんだ。だけど僕は、彼女をどう愛していいかわからないほど子どもだったんだ。) ³⁹ 王子さまは彼女の愛し方が分からないので、真実の愛を探す旅にでます。Higgins は、“The journey of the little prince is a quest in pursuit of the meaning of love. It is a spiritual journey filled with mystery. It springs more from the heart than from the mind, and it is the hearts of its readers that it hopes to reach. (小さな王子さまの旅は愛の意味を追求するための探索なのです。その旅は、神秘で満たされた精神的な旅なのです。それは頭からではなく心の中から湧き出たもので、たどり着くことを願う読者たちの心でもあるのです。)” と書いています。 ⁴⁰ たしかに小さな王子さまは、物語の終わりに愛の意味を見つけるところまで行き着きます。地球上での王子さまの旅は、どのようにして王子さまが愛の意味を理解するようになったかという過程を明らかにしています。

王子さまは地球に向かう旅の途中で様々な大人たちと出会いました。その大人たちと友達になり友情の中に愛を見つけ出そうとしましたが、自己中心的な大人たちとの交流の中で愛を見つけることはできませんでした。しかし、点灯夫からは真実の愛を見つけるためのヒントをもらいました。愛には忠実さと責任感が必要不可欠なのです。しかし、最終的に愛とは何かを王子さまに教えたのは点灯夫ではなく、賢いきつねでした。王子さまはきつねに出会う前に五千ものバラが咲いている庭園を訪ねます。そして自分のバラのことを思い出し、そのバラがこの世にたった一つのめずらしい花ではなく、普通の花でしかなかったことを知ります。彼は泣きながら、“Je me croyais riche d’une fleur unique, et je ne possède qu’une

³⁹ PP, 33

⁴⁰ Higgins, 79

rose ordinaire. ...ça ne fait pas de moi un bien grand prince...”（とても珍しい花を持っている僕は豊かなのだと思っていた。そして僕の持っていた花は普通のバラでしかなかった。... これでは立派な王子にはなれはしない,,）と言います。⁴¹ 絶望した王子さまを慰めてくれたのがきつねでした。そのきつねは人と人の絆を作り出すという意味の “*apprivoiser*”（飼いならす）ということの大切さを王子さまに教えます。⁴² “*apprivoiser*” の過程を通してきつねは、王子さまにとって他のきつねとは違う特別な存在となり、そしてまた王子さまもきつねにとって他の少年とは違う特別な存在になるのです。

ついに王子さまは、特別な友達と愛の意味をこのきつねとの友情を育む中で見つけ出します。王子さまの親友は友情という愛を知ることがどんなに素晴らしいかということを王子さまに教えます。友人との思い出をもつことによって王子さまは、この世界が以前とは違うもののように思えるようになるのです。小麦を食べないきつねにとって、麦畑は何の意味も持ちませんでした。しかし金髪の王子さまと友達になったきつねは、金色に輝く麦畑によって王子さまとの友情を思い出すことができるのです。Higgins は次のように説明しています。

One yearns never to forget those whom one has come to love, even if that love is the result of a single brief encounter. For if love is not ... eternal, we still wish it to be. The world of nature is filled with sensual reminders that help to keep love alive in the halls of memory, even after the loved one is no longer physically present. It is the golden color of the wheat that will forever remind the fox of the prince...⁴³

（訳）人はたとえたったひとときの出会から生まれた愛だとしても、愛するようになった人たちのことを決して忘れないことを願うものです。愛が永遠でないとしても、私たちは永遠であってほしいと願うからです。自然の世界は、愛する人がもはや物理的に存在しなくなった後でも、記憶という大広間の中に愛を生かし続けておくための感覚的な物事で満ちています。きつねに王子さまのことを永遠に思い出させるものが小麦の黄金色なのです。

王子さまときつねは、お互いに慣れ親しむことによって愛し合うようになったのです。このことを理解した王子さまは、自分がバラの花と慣れ親しんでいたということについて気付きます。バラに水をやり覆いをかぶせ、自慢話を聞くなどして自分の時間をバラのために使うことによって、王子さまはバラの花と慣れ親しみ、愛情を育んでいたのです。そのバラは王子さまにとって、他のバラとは違う世界でただ一つの特別なバラになっていたのです。王子さまは、彼を悲しませたバラたちに自信を持って言います。

⁴¹ PP, 66

⁴² PP, 68

⁴³ Higgins, 76

Vous n'êtes pas du tout semblables à ma rose, vous n'êtes rien encore, leur dit-il. Personne ne vous a apprivoisées et vous n'avez apprivoisé personne. Vous êtes comme était mon renard. Ce n'était qu'un renard semblable à cent mille autres. Mais j'en ai fait mon ami, et il est maintenant unique au monde. ... Vous êtes belles, mais vous êtes vides, leur dit-il encore. On ne peut pas mourir pour vous. Bien sûr, ma rose à moi, un passant ordinaire croirait qu'elle vous ressemble. Mais à elle seule elle est plus importante que vous toutes, puisque c'est elle que j'ai arrosée. Puisque c'est elle que j'ai mise sous globe. Puisque c'est elle que j'ai abritée par le paravent. Puisque c'est elle dont j'ai tué les chenilles (sauf les deux ou trois pour les papillons). Puisque c'est elle que j'ai écoutée se plaindre, ou se vanter, ou même quelquefois se taire. Puisque c'est ma rose.⁴⁴

(訳)

君たちは僕のばらとは全然似ていないよ。全く似ていない、と彼は言いました。誰も君たちを飼いなさなかったし、君たちも誰にもなつかなかった。最初の頃の僕のきつねと同じだ。あのきつねは10万匹のほかのきつねと同じだったんだ。でも彼を僕の友達にして、今では彼は世界中でたった一匹のきつねになったんだ。,, 君たちは綺麗だけど、空しいんだよ。君たちのために死ぬ人は誰もいないよ。もちろん普通の通りがかりの人は僕のバラを君たちとそっくりだと思うだろう。でも僕のバラは一輪だけで君たち全部よりもっと大切なんだ。彼女には僕が水をやったんだから。彼女は僕がガラスの中にいれてあげたんだ。ついたての後ろに隠してあげて、毛虫を殺してあげたんだ(2, 3匹は蝶になるように助けたけど)。彼女は僕が愚痴や自慢話を聞いてあげて何も言わないときでさえ耳を傾けてあげたバラなんだ。彼女は僕のバラだからだ。

王子さまははじめて愛の秘密を知ります。それは、自分の時間をバラのために犠牲にしたからこそ、本当に彼女を愛するようになったということです。そのバラの花はついに王子さまにとって唯一の存在となったのです。彼女は五千もの他のバラとは違うバラになりました。このことは、王子さまが故郷の星を旅立ったときには知らなかった決定的な事実なのです。

王子さまはついに、きつねの言った“on ne voit bien qu'avec le coeur. L'essentiel est invisible pour les yeux.”(心で見なければはっきりとは見えないよ。本質的なことは目には見えないんだ。)ということばの意味を理解するのです。⁴⁵ その目に見えない本質的なものとは、王子さまがバラの世話をし、二人の間の愛を育むために費やした時間のことなのです。しかしきつねはそれ以上のことを王子さまに教えています。きつねは王子さまに、“Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose...”(君は自分で飼いならしたものに対して永遠に責任をもたなければならなくなったんだ。君は君のバラに責任があるんだ。)とも言っています。⁴⁶ きつねのこの助言によって

⁴⁴ PP, 72

⁴⁵ PP, 72

⁴⁶ PP, 74

王子さまは決心をかためます。王子さまはバラへの責任を果たすために死ななくてはならなかったのです。Drewermann はこのことを次のように説明します。

The conversation with the fox has ultimately left the Little Prince with a crucial new realization: "I am responsible for my rose." Everything that Saint-Exupéry has to say about love, life, and death, using the whole palette of symbolic religious language, culminates in this one point: The meaning of things does not lie in themselves but in their interconnection, which is disclosed through the exchange of mutual relationship and responsibility. But for the Little Prince this means having to take his departure from the world and returning to his rose, which he had so guiltily left behind. And this return means his death. His time is up. The measure of his stay on earth is full.⁴⁷

(訳)

きつねとの会話によって、最終的に王子さまは非常に重要な新しい悟りを開きます。それはつまり、「僕はバラの花に責任がある」ということです。象徴的で宗教的な言葉によるパレット全体を使って、愛と生命と死についてサン＝テグジュペリが言いたかったことの全ては、物事の意義はそれ自身にあるのではなく、その物事同士の相互の連結であり、それは相互的な関係と責任の交換を通じて明らかになってくるということに尽きるのです。しかし小さな王子さまにとってこのことは、この世界から旅立って、罪なことに後に残してきたバラの元に帰らなければならないということを意味しています。そして、バラの元に帰ることは死を意味しています。王子さまの時間は尽き果て、地上にとどまる限界を迎えたのです。

王子さまは小さな星で彼の帰りを待っている、愛するバラの花に“*responsible*(責任がある)”ことに気付き、死を選びます。それは王子さまが故郷の星を旅立ったちょうど一年後のことでした。王子さまの地球への旅は、愛するとはどういうことなのかという疑問に対する答えを見つけるためのものでした。しかし、王子さまにとって、いまやその意味を理解した愛のために責任を果たせる場所は地上にはありません。そのために王子さまは、真実の愛をつかむために地球を去り、故郷の惑星に帰らなければならなかったのです。

王子さまはただ地球を去るのではなく、王子さまを星に帰すと約束した毒蛇に頼み、地上での肉体を棄てます。このことから、責任と愛と死の関係を理解することができると思います。王子さまはバラを愛するからこそ、彼女に責任を持たなければならないのです。これは「人間の土地」でギョメやサン＝テグジュペリ自身が自分の命を自分自身のものとは考えず、愛する妻のものであると考えたことが「星の王子さま」の王子さまとバラの関係にも当てはめられているのです。王子さまの命は王子さまのものではなく、バラのものになっていたのです。そのため王子さまはバラのために死ぬのです。こうして王子さまの死は自己犠牲の愛

⁴⁷ Drewermann, 61

を象徴していることが証明されます。

<完>

(まやなぎ まみ 本学非常勤講師)